

奥田 ちよっとすみません。この年の全国大会のテーマは手元の資料では「昭和三十年代の短歌」になっていますが。

清水 「現代短歌のキーワード、昭和三十年代の短歌」という長いテーマです。

加古 メインが「現代短歌のキーワード」で、サブが「昭和三十年代の短歌」です。

高山 なるほど。このころ、テーマ詠が盛んで、その一環だと思いますが、このあたりから、お話し、お願いします。

幸綱 多分、俵万智『サラダ記念日』が出て、「時、「ライトヴァース」が時代のテーマになった。ライトヴァース、これに岡井隆さんが乗って、「これだ。現代短歌はこれじゃない」とって言ったんだが、わりと早く色褪せて、もう一回、きちっと前衛短歌を見直さなくちゃいけないんじゃないかなとなった。そういう文脈だと思う。菱川善夫さんが「心の花」全国大会の講師ということもあって、それでいこうということになったんだらう。文学史的な展望が欲しかったんだね。

清水 八月号に事前資料が載っていて、先生もその号の「短歌の現在」で、「三十年代は「比喩」と「私」性」と「時代と文学」の三点が三十年代の主要な問題で、これをまた取り上げたいみたい、と書かれています。

高山 それがこの大会のテーマだったのかな。黒岩さんは参加していたでしょ。どうだった？

黒岩 いやいや、まあまあ。

幸綱 三十数年も昔だから、忘れちゃった？(笑)

清水 私は若いとき、全国大会に二回しか出てないから、この全国大会はすごく印象的でした。このとき、菱川さんがいらっしやって、「にせハムレット」を谷岡亜紀さんの脚本、演出でやって、ハムレットを大津仁昭さん、オフィーリアを俵万智さん、お父さんの王様を黒岩剛仁さん、王妃を平塚里絵さんがされました。セリフの代わりに短歌を朗読していくような劇でした。その中で私と安藤美保さんが「三十年代の挽歌を読む歌姫」という役で出させてもらったんです(笑)。

加古 もう一人、武田ますみさん。

清水 そう、歌姫は三人でした。幸綱先生が昭和三十八年に塚本邦雄の脚本で「律」三号に「偽ハムレット」を誌上上演されました。そのとき、ハムレットが幸綱先生で、オフィーリアが河野深雪さん、クローディアスが藤田武さん、ガートルードが馬場あき子さん。

幸綱 小野茂樹も出たね。

清水 そう。ホレーシオというハムレット

のお友だちで。これをきつと意識されたんでしょうね。

黒岩 焼き直す、じゃないが、俺たちなりに解釈し直して、やるう、みたいな。

清水 これをすごくよく覚えていたのは、安藤美保さんの歌集の中にこのときの歌姫で詠んだ歌がいっぱい出てて、私は全く自分は何を詠んだか忘れちゃってるんですけど、『水の粒子』を読むたびに、ああ、と思いついていたんです。

黒岩 そのときラッキーなことに、本阿弥書店の「歌壇」の編集長が島田尋郎(牙城)さんで、彼はわりあいやりたいたいようにやっている感じだったので、「歌壇」のある号の巻末付録に、谷岡が作った台本で、僕たちは歌を詠んでいるわけだが、それを全部載っけてくれた。緑色の紙で別刷りみたいな。それに講師として来られた菱川善夫さんが解説を書いてくれたりして、とても嬉しかったのを覚えています。「ちゃんと記録が残った」って。

高山 場所は日本青年館で、その後、ここをやったことはないんじゃないか。

清水 前の年もそこだったでしょう。

黒岩 二年続けてやったよ。

高山 谷岡がよく言っていたけど、結構安くて、楽しかった思い出があるらしい。

黒岩 確か、日本青年館で二回やって、二